

学術論文と論説文における「だから」の使用の比較

向坂卓也（中国・外交学院）[†]

Comparison of the Usage of "Dakara" in Academic Papers and Editorial Texts

Takuya Mukozaka (China Foreign Affairs University)

要旨

日本語文章表現の教材には「だから」は話し言葉であり、書き言葉文では使用されないとしているものと、書き言葉であり、書き言葉文では使用されるとしているものがある。一口に「硬い文章」といってもジャンルや分野によって特徴があると考えられる。そこで本研究では J-stage の 15 学会誌の学術論文と webronza の 5 分野の論説文における「だから」を含む順接接続詞の使用状況を調査した。理系学術論文では「だから」の使用が稀だが、文系学術論文では分野によっては使用され、論説文では各分野で使用されていることがわかった。「だから」は主観的な結論付けを表す接続詞であり、著者の主観的結論付けが行われる場合に「だから」が使用される。「だから」が使用されないジャンルや分野では、話し言葉であるため使用されないのではなく、結論付けの際に客観性が要求されるため使用されないの

1. はじめに

日本語文章表現の教材には「だから」は話し言葉であり、書き言葉文では使用されないとしているものと、書き言葉であり、書き言葉文では使用されるとしているものがある。教材によってなぜこのような違いが生じるのだろうか。これらの教材はいわゆる「硬い文章」を書くことを学習目標としている。しかし、一口に「硬い文章」といってもジャンルや分野は様々であり、それぞれに特徴があるのではないだろうか。そこで本研究では「硬い文章」とされる学術論文と論説文の各分野における「だから」を含む順接接続詞の使用状況を調査する。

学術論文については国立研究開発法人科学技術振興機構が運営する学術論文の電子公開システムである J-stage に収録されている 15 学会誌各 50 本（全て著者が異なる）の学術論文、論説文については朝日新聞社が運営する言論サイト webronza に収録されている 5 分野各 50 本（全て著者が異なる）の論説文を調査対象とする。

2. 日本語文章表現教材における「だから」の取り扱い

日本語文章表現教材における「だから」の取り扱いについて調査した。教材が対象とする学習者、目標とする文章¹、「だから」を話し言葉としているか、書き言葉としているかについて表 1 にまとめた。

①～⑭が「だから」を話し言葉、⑮～⑱が「だから」を書き言葉としている教材である。論文・レポートを書くことを目標としている教材は、いずれも「だから」を話し言葉としている（①②、④～⑫）。小論文を書くことを目標とした教材は「だから」を話し言葉としているもの（③、⑫～⑭）と書き言葉としているもの（⑮～⑱）がある。「だから」を書き言葉であるとしている教材は、いずれも高校生向けに小論文を書くことを目標としている（表 1）。

[†] xiangban_zhuoye[at]yahoo.co.jp

¹ 教材が目標とする文章を「論文・レポート」と「小論文」に 2 つに分類した。「論文・レポート」として一まとめに目標とする教材が多いことから、「論文・レポート」として分類することにした。

表1 日本語文章表現教材における「だから」の取り扱い

「だから」を話し言葉としている教材								
	教材名	話し言葉	書き言葉	対象			目標	
				留学生	大学生	高校生	論文・レポート	小論文
①	『大学生と留学生のための論文ワークブック』(1997)	だから/それで	ゆえに/それゆえ/したがって	○	○		○	
②	『改訂版 留学生のための論理的な文章の書き方』(2003)	だから	したがって	○			○	
③	『小論文への12ステップ』(2008)	だから/ですから	そのため/したがって	○				○
④	『留学生のためのここが大切文章表現のルール』(2009)	だから	したがって	○			○	
⑤	『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』(2009)	だから	したがって	○	○		○	
⑥	『論文・レポートの基本』(2012)	だから	そのため		○		○	
⑦	『改訂版 大学・大学院 留学生の日本語④論文作成編』(2015)	だから/ですから	そのため/そこで/したがって	○			○	
⑧	『学生のレポート・論文作成トレーニング-改訂版-』(2015)	だから/なので	そのため/それゆえ/それで		○		○	
⑨	『レポート・論文を書くための日本語文法』(2016)	だから/それで	そのため/したがって	○			○	
⑩	『21世紀のカレッジ・ジャパニーズ』(2018)	だから/それで	そのため/したがって	○	○		○	
⑪	『思考を鍛えるレポート・論文作成法第3版』(2019)	だから	したがって		○		○	
⑫	『日本語を学ぶ人のためのアカデミック・ライティング講座』(2020)	ですから/だから/なので/そして/それで/で	そのため/したがって/そこで/その結果/よって/ゆえに	○			○	○
⑬	『改訂版 何を書けばわからない人のための小論文のオキテ』(2020)	だから/なので	そこで/したがって			○		○
⑭	『7日間で合格する小論文』(2021)	なので/だから	したがって/そのため			○		○
「だから」を書き言葉としている教材								
	教材名	話し言葉	書き言葉	対象			目標	
				留学生	大学生	高校生	論文・レポート	小論文
⑮	『大学入試小論文の完全攻略本』(2010)	なので	だから/よって/ゆえに/したがって			○		○
⑯	『小論文 これだけ!書き方超基礎編』(2013)	なので	だから			○		○
⑰	『小論文をひとつひとつわかりやすく』(2016)	なので	だから/したがって			○		○
⑱	大修館書店『国語表現 改訂版(平成30年)』(2018)	なので	だから/したがって			○		○

3. 「だから」に関する先行研究

前章では日本語文章表現教材には「だから」を話し言葉としているものと、書き言葉としているものがあることについて述べた。「だから」を話し言葉としている教材では書き言葉文では「だから」ではなく「したがって」「そのため」「それゆえ」「よって」などの書き言葉を使うように指示されている。

では、「だから」と「したがって」「そのため」「それゆえ」「よって」「ゆえに」にはどの

ような違いがあるのだろうか。

そこでまず、第1節で「だから」と書き言葉において「だから」に換えて使用されるべきであるとされる「したがって」「そのため」「それゆえ」「よって」「ゆえに」などとの違いについて言及した先行研究を見ていくことにする。

また、論文・レポートを書くことを目標としている教材は、いずれも「だから」を話し言葉としているが、小論文を書くことを目標としている教材は、「だから」を話し言葉としているものもあれば、書き言葉としているものがある。そこで第2節でジャンルの違いによって「だから」の使用状況がどのように異なるのかについて論じた先行研究を見ていくことにする。

3.1 「だから」とその他の順接接続詞の意味の違いに関する先行研究

ひげ (1987) は「だから」を「はなし手の意志や主観による論理のたて方」とするいっぽうで、「したがって」を「はなし手 (かき手) はある (いくつかの) 事実を根拠として、そこから客観的にみちびきだされる結論についてのべる」ものであるとする (pp.55)。

石黒 (2016) は「だから」「ですから」「だからこそ」を書き手の判断で主観的にむすびつける「主観の接続詞」(p.26) とし、後件の文末に指示や要求を表す表現が使われ、客観性を重んじる論文などではあまり使われないことを指摘している。「したがって」「よって」「それゆえ」を主観を交えず、論理的必然を表す「必然の接続詞」(p.28) とし、論理性を重視する学問によく使われる表現であると述べている。「そのため」を「原因の接続詞」(p.30) とし、前件が後件の原因であることを示すのに適しているものであるとしている。

沖森 (2016) は「だから」について、後件に話し手の意志や主観的な判断が示されることがあるとしている (p.89)。一方、「そのため」は前に述べた事柄から引き出される客観的な事柄を次に導くものであり (p.92)、「したがって」も前件から導き出される客観的な事柄を次に導くものであり (p.97)、いずれも文末に話し手の主観的な表現は一般的に用いられず、また書きことばで用いられる表現であることをしている。さらに「ゆえに」の系列 («それゆえ」「それゆえに」「そのゆえ」「そのゆえに»), 「よって」の系列 («それによって」「それにより») を前述の内容を受け、必然的にある結論に帰着するというように論理的に次の事柄を導くものであるとしている (p.98)。

以上の先行研究においては「だから」は主観的な結論付けを表す接続詞であり、「したがって」「そのため」「それゆえ」「ゆえに」「よって」などが客観的な結論付けを表す接続詞であるという違いについて言及されている。

3.2 ジャンルの違いによる「だから」の使用状況に関する先行研究

劉 (2006) は CASTLE/L (日本語教育支援システム研究会) が開発した教材テキストデータベースに収録されている論説文における「だから」の使用回数を調査した結果、「だから」が 103 回、「したがって」が 133 回であり、「だから」は「したがって」よりも使用回数が少ないものの、学術論文とは異なり、著者の主観が許される論説文では「だから」が用いることができると述べた。話し手が「だから」を用いる時は「自分の中に働いている因果関係の知識が聞き手の中に成立していない (または成立しない) と仮定する場合」だが、客観性が求められる学術論文では「論証に必要とされる因果関係の知識が読み手の中にも成立すると仮定している」ため、学術論文では「だから」は用いられないことを指摘している。ただし、劉 (2006) は学術論文における「だから」の使用回数については調査していない (p.133)。

向坂 (2019) は紀要論文・博士論文における「だから」の使用状況 (使用の出現数と使用者数) を調査した。そして「理系分野の学術論文では「だから」の使用が見られなかったが、文系分野の学術論文では一定数の使用が見られた。数値などの客観的な証拠に基づいて研究する理系分野とは異なり、文系分野では客観的な証拠に基づいた研究しているとは限らず、著者の主観性が入り込む余地がある。そのことが文系分野の学術論文において「だから」を出現させていると考えられる」と論じている (pp.186-187)。

向坂（2019）は学術論文の使用状況を調査したが、調査対象が文系分野は文学（63本）、社会学（43本）、言語学（57本）、経済学（46本）の4分野209本の論文であったが、一方、理系分野は「理工学」に一本化しており、しかも19本と限定的であった。そこで本研究ではより幅広い分野におけるより多くの学術論文を調査対象とし、さらに論説文も調査対象とすることで学術論文と論説文における「だから」を含めた順接接続詞の使用状況を比較していくことにする。

4. 学術論文と論説文における順接接続詞の使用状況の調査

4.1 学術論文と論説文の違い

本研究では学術論文と論説文における「だから」を含む順接接続詞の使用状況を調査するが、その前に学術論文と論説文の違いについて述べる。

国語教育研究所（1991）は「広くは事柄を論ずる文章」としての「論文」を三つに分類している。「(1)ある事について自分の意見を述べ、論議する文章。広い意味での議論文で、政治、外交、経済、社会などの一般的な問題を論じるのが、「論説文」「批評文」や「調査報告」であり、「(2)専門的な問題について研究目的、経過、結果をまとめ、新しい見解を提示する文章」が「学術論文」や大学の「卒業論文」などであり、「(3)入社試験、大学入試に、特定の項目、作成条件を付して出される課題について論ずる文章」が「小論文」や「課題論文」である（p.872）。

国語教育研究所（1991）の定義を参考にすれば、学術論文は(2)、論説文は(1)に該当する。学術論文と論説文の違いは「専門的な問題」についてか「一般的な問題」についてか、そして「新しい見解を示す文章」か「自分の意見を述べる文章」かであると考えられる。

4.2 学術論文と論説文における順接接続詞の使用状況の調査方法

本研究では以下の方法で学術論文と論説文における「だから」を含む順接接続詞の使用状況を調査する。

- ①J-stage（国立研究開発法人科学技術振興機構が運営する学術論文の電子公開システム）に収録されている15学会誌の著者が異なる各50本の学術論文、論説文はwebronza（朝日新聞社の言論サイト）に収録されている5分野の著者が異なる各50本の論説文を対象とする。
- ②著者が特定できる学術論文及び論説文を対象とし、共著などの著者が特定できないものは除外する。
- ③「だから」²の他にも順接接続詞である「それで」「なので」「よって」「ゆえに」「それゆえ」「そのゆえ」「その結果」「そのため」「このため」³「したがって」の使用件数を調査する。また、各分野における使用者数（一人の著者が一度でも接続詞を使えば使用者として計数する）を調査する。
- ④J-Stageに収録されている学術論文はpdfファイルをダウンロードし、pdfの検索機能を使い、順接接続詞を検索する。pdfファイルをword化し、wordの文字カウント機能により文字数を計数する。webronzaの論説文はwordに貼り付け、wordの検索機能を使い、順接接続詞を検索する。wordの文字カウント機能によりの文字数を計数する。
- ⑤敬体が使用されているものは除外する。
- ⑥直接引用の部分は調査対象から除外する。

² 「だから」は「だからこそ」「だからか」も対象とするが、逆接的な用法である「だからといって」「だからというわけではないが」は対象外とする。「そのため」「このため」は順接の用法のみを対象とし、目的の用法は対象外とする。向坂（2021）ではJ-Stageに収録されている学会誌の学術論文における「ことから」「から」「だから」の使用件数を調査したが、このときは各40本であった。またこのときは「だからといって」「だからというわけではないが」も対象としていた。

³ 「そのため」「このため」は順接の用法を対象とし、目的の用法は対象外とした。

⑦学術論文は学会誌ごと、論説文は分野ごとの順接接続詞の使用件数を計数し、さらに10万字あたりの使用件数を算出する。

⑧学術論文は学会誌ごと50著者、論説文は分野ごと50著者における順接接続詞の使用件数を計数し、使用者の比率を算出する。

4.3 学術論文における順接接続詞の使用状況の調査結果

J-stage に収録されている15学会誌の学術論文における順接接続詞の使用件数を調査した結果が表2である(上段が使用件数, 下段が10万字当たりの使用件数)。各学会誌における順接接続詞の使用件数とその比率をまとめたのが表3である(上段が使用者数, 下段が使用者比率)。

表2 J-stage の学術論文における順接接続詞の使用件数(上段:使用件数 下段:10万字当たりの使用件数)

	分野	字数	だから	それで	なので	よって	ゆえに	それゆえ	そのゆえ	その結果	そのため	このため	したがって	
文系	『日本文学』	日本文学	729,399	25 3.4	1 0.1	0 0.0	2 0.3	1 0.1	9 1.2	0 0.0	9 1.2	8 1.1	1 0.1	28 3.8
	『日本語の研究』	日本語学	865,913	1 0.1	0 0.0	0 0.0	34 3.9	1 0.1	4 0.5	0 0.0	36 4.2	73 8.4	4 0.5	80 9.2
	『日本語教育』	日本語教育学	940,700	1 0.1	0 0.0	0 0.0	22 2.3	3 0.3	4 0.4	0 0.0	103 10.9	77 8.2	9 1.0	43 4.6
	『年報社会学論集』	社会学	904,634	13 1.4	0 0.0	0 0.0	8 0.9	14 1.5	59 6.5	0 0.0	31 3.4	79 8.7	12 1.3	57 6.3
	『宗教哲学研究』	宗教哲学	828,695	11 1.3	5 0.6	0 0.0	13 1.6	6 0.7	87 10.5	0 0.0	17 2.1	50 6.0	3 0.4	118 14.2
	『刑法雑誌』	刑法学	701,881	12 1.7	0 0.0	0 0.0	7 1.0	8 1.1	62 8.8	0 0.0	26 3.7	64 9.1	5 0.7	127 18.1
	『国際政治』	国際政治学	1,114,644	2 0.2	0 0.0	0 0.0	10 0.9	5 0.4	33 3.0	0 0.0	40 3.6	110 9.9	8 0.7	71 6.4
	『国際経済』	国際経済学	984,529	4 0.4	2 0.2	0 0.0	35 3.6	4 0.4	23 2.3	0 0.0	65 6.6	61 6.2	22 2.2	122 12.4
	『日本経営学会誌』	経営学	1,056,199	1 0.1	0 0.0	0 0.0	42 4.0	13 1.2	60 5.7	0 0.0	69 6.5	159 15.1	34 3.2	145 13.7
	文系合計		8,126,594	70 0.9	8 0.1	0 0.0	173 2.1	55 0.7	341 4.2	0 0.0	396 4.9	681 8.4	98 1.2	791 9.7
理系	『数学』	数学	1,747,464	4 0.2	0 0.0	0 0.0	133 7.6	20 1.1	59 3.4	0 0.0	10 0.6	72 4.1	11 0.6	403 23.1
	『日本内科学会雑誌』	内科医学	648,009	0 0.0	0 0.0	0 0.0	14 2.2	1 0.2	2 0.3	0 0.0	34 5.2	25 3.9	7 1.1	49 7.6
	『化学と生物』	農芸学	635,408	0 0.0	0 0.0	2 0.3	5 0.8	1 0.2	14 2.2	0 0.0	75 11.8	41 6.5	10 1.6	63 9.9
	『日本化学会情報化学部会誌』	情報化学	649,547	2 0.3	0 0.0	0 0.0	3 0.5	2 0.3	3 0.5	0 0.0	15 2.3	48 7.4	15 2.3	80 12.3
	『海の研究』	海洋学	1,440,749	1 0.1	0 0.0	0 0.0	11 0.8	0 0.0	5 0.3	0 0.0	126 8.7	79 5.5	52 3.6	95 6.6
	『鉄と鋼』	鉄鋼学	909,423	0 0.0	0 0.0	0 0.0	11 1.2	2 0.2	3 0.3	0 0.0	39 4.3	70 7.7	21 2.3	121 13.3
	理系合計		6,030,600	7 0.1	0 0.0	2 0.0	177 2.9	26 0.4	86 1.4	0 0.0	299 5.0	335 5.6	116 1.9	811 13.4

「だから」の使用状況は、文系と理系で異なった様相を示している。文系では「だから」の10万字当たりの使用件数が0.9件だが、理系では0.1件である(表2)。使用者比率では「だから」を使用している著者は文系が9.8%であるのに対し、理系は2%である(表3)。

文系全体の順接接続詞では「したがって」が9.7件と最も多く使用されており、「だから」(0.9件)の使用件数は「したがって」の使用件数の9.2%である。しかし、日本文学では「だから」の使用件数が3.4件であり、文系の他の分野と比べて多い。また日本文学の学術論文の順接接続詞では「したがって」の3.8件に次いで「だから」が3.4件使用されており、「だから」の使用件数は「したがって」の使用件数の89.4%である。社会学, 宗教哲学, 刑法では「だから」の10万字当たりの使用件数が1.3~1.7件であるが, 日本語学, 日本語教育学, 国際政治学, 国際経済学, 経営学では0.1~0.4件と少ない(表2)。

使用者数でみると, 日本文学の学術論文における「だから」の使用者比率は26%である。この割合は論説文全体における「だから」の使用者比率である28.4%に近い数値である。また社会学では著者のうち22%, 宗教哲学では14%, 刑法では12%の著者が「だから」を使用している。日本語学, 日本語教育学, 国際政治学, 国際経済学, 経営学は使用者比率が2~6%と少なくなっている(表4)。

論文・レポートを作成するための教材では, 「だから」が話し言葉であり, 論文・レポートでは使用すべきではないと説明されている。確かに理系学術論文では「だから」の使用が稀だが, 文系学術論文では分野によっては使用されているのである。

表3 J-stageの学術論文における順接接続詞の使用者数と使用者比率(上段:使用者数 下段:使用者比率)

	分野	著者数	だから	それで	なので	よって	ゆえに	それゆえ	そのゆえ	その結果	そのため	このため	したがって
『日本文学』	日本文学	50	13	1	0	1	1	7	0	7	7	1	12
			26.0%	2.0%	0.0%	2.0%	2.0%	14.0%	0.0%	14.0%	14.0%	2.0%	24.0%
『日本語の研究』	日本語学	50	1	0	0	12	1	4	0	20	20	4	21
			2.0%	0.0%	0.0%	24.0%	2.0%	8.0%	0.0%	40.0%	40.0%	8.0%	42.0%
『日本語教育』	日本語教育学	50	1	0	0	11	3	3	0	35	34	5	19
			2.0%	0.0%	0.0%	22.0%	6.0%	6.0%	0.0%	70.0%	68.0%	10.0%	38.0%
『年報社会学論集』	社会学	50	11	0	0	4	4	19	0	22	34	9	27
			22.0%	0.0%	0.0%	8.0%	8.0%	38.0%	0.0%	44.0%	68.0%	18.0%	54.0%
『宗教哲学研究』	宗教哲学	50	7	2	0	6	6	28	0	11	14	3	36
			14.0%	4.0%	0.0%	12.0%	12.0%	56.0%	0.0%	22.0%	28.0%	6.0%	72.0%
『刑法雑誌』	刑法学	50	6	0	0	4	4	19	0	15	28	1	34
			12.0%	0.0%	0.0%	8.0%	8.0%	38.0%	0.0%	30.0%	56.0%	2.0%	68.0%
『国際政治』	国際政治学	50	1	0	0	8	3	16	0	27	36	4	24
			2.0%	0.0%	0.0%	16.0%	6.0%	32.0%	0.0%	54.0%	72.0%	8.0%	48.0%
『国際経済』	国際経済学	50	3	2	0	5	2	10	0	25	22	9	32
			6.0%	4.0%	0.0%	10.0%	4.0%	20.0%	0.0%	50.0%	44.0%	18.0%	64.0%
『日本経営学会誌』	経営学	50	1	0	0	9	4	17	0	27	33	13	39
			2.0%	0.0%	0.0%	18.0%	8.0%	34.0%	0.0%	54.0%	66.0%	26.0%	78.0%
文系合計		450	44	5	0	60	28	123	0	189	228	49	244
			9.8%	1.1%	0.0%	13.3%	6.2%	27.3%	0.0%	42.0%	50.7%	10.9%	54.2%
『数学』	数学	50	3	0	0	27	12	12	0	8	28	9	44
			6.0%	0.0%	0.0%	54.0%	24.0%	24.0%	0.0%	16.0%	56.0%	18.0%	88.0%
『日本内科学会雑誌』	内科医学	50	0	0	0	6	1	2	0	18	18	3	18
			0.0%	0.0%	0.0%	12.0%	2.0%	4.0%	0.0%	36.0%	36.0%	6.0%	36.0%
『化学と生物』	農芸学	50	0	0	1	5	1	5	0	34	14	5	26
			0.0%	0.0%	2.0%	10.0%	2.0%	10.0%	0.0%	68.0%	28.0%	10.0%	52.0%
『日本化学会情報化学部会誌』	情報化学	50	2	0	0	2	2	2	0	8	27	10	25
			4.0%	0.0%	0.0%	4.0%	4.0%	4.0%	0.0%	16.0%	54.0%	20.0%	50.0%
『海の研究』	海洋学	50	1	0	0	7	0	3	0	38	26	19	28
			2.0%	0.0%	0.0%	14.0%	0.0%	6.0%	0.0%	76.0%	52.0%	38.0%	56.0%
『鉄と鋼』	鉄鋼学	50	0	0	0	7	2	3	0	23	27	11	32
			0.0%	0.0%	0.0%	14.0%	4.0%	6.0%	0.0%	46.0%	54.0%	22.0%	64.0%
理系合計		300	6	0	1	54	18	27	0	129	140	57	173
			2.0%	0.0%	0.3%	18.0%	6.0%	9.0%	0.0%	43.0%	46.7%	19.0%	57.7%

4.4 論説文における順接接続詞の使用状況の調査結果

朝日新聞社言論サイト webronza に収録されている5分野(「文化・エンタメ」「科学・環

境「政治・国際」「経済・雇用」「社会・スポーツ」)における順接接続詞の使用件数を調査した結果が表4である(上段が使用件数, 下段が10万字当たりの使用件数)。5分野における順接接続詞の使用者数とその比率をまとめたのが表5である(上段が使用者数, 下段が使用者比率)。

webronzaの論説文における「だから」の使用件数は10万字あたり8.7件であり, 順接接続詞の中では最も多い。また学術論文(文系が0.9件, 理系が0.1件)に比べると「だから」が多く使用されていることがわかる。また(表4)。また使用者比率で見ても「だから」は28.4%であり, 最も使用者数が多く, 使用者比率で見ても学術論文よりも「だから」が多く使用されていることがわかる(表5)。

表4 webronzaの論説文における順接接続詞の使用件数(上段:使用件数 下段:10万字当たりの使用件数)

分野	字数	だから	それで	なので	よって	ゆえに	それゆえ	そのゆえ	その結果	そのため	このため	したがって
文化・エンタメ	262,997	30	0	0	0	0	3	0	2	11	4	8
		11.4	0.0	0.0	0.0	0.0	1.1	0.0	0.8	4.2	1.5	3.0
科学・環境	250,137	13	2	2	0	1	0	0	19	22	13	16
		5.2	0.8	0.8	0.0	0.4	0.0	0.0	7.6	8.8	5.2	6.4
政治・国際	276,833	19	0	0	0	6	2	0	8	16	5	11
		6.9	0.0	0.0	0.0	2.2	0.7	0.0	2.9	5.8	1.8	4.0
経済・雇用	261,933	26	1	0	1	1	1	0	5	9	8	9
		9.9	0.4	0.0	0.4	0.4	0.4	0.0	1.9	3.4	3.1	3.4
社会・スポーツ	269,858	27	1	0	0	1	6	0	7	9	0	11
		10.0	0.4	0.0	0.0	0.4	2.2	0.0	2.6	3.3	0.0	4.1
合計	1,321,758	115	4	2	1	9	12	0	41	67	30	55
		8.7	0.3	0.2	0.1	0.7	0.9	0.0	3.1	5.1	2.3	4.2

表6 webronzaの論説文における順接接続詞の使用者数と使用者比率(上段:使用者数 下段:使用者比率)

分野	著者数	だから	それで	なので	よって	ゆえに	それゆえ	そのゆえ	その結果	そのため	このため	したがって
文化・エンタメ	50	24	0	0	0	0	3	0	2	9	2	7
		48.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	6.0%	0.0%	4.0%	18.0%	4.0%	14.0%
科学・環境	50	9	2	2	0	1	0	0	13	15	11	14
		18.0%	4.0%	4.0%	0.0%	2.0%	0.0%	0.0%	26.0%	30.0%	22.0%	28.0%
政治・国際	50	13	0	0	0	3	2	0	7	13	3	9
		26.0%	0.0%	0.0%	0.0%	6.0%	4.0%	0.0%	14.0%	26.0%	6.0%	18.0%
経済・雇用	50	14	1	0	1	1	1	0	3	7	7	8
		28.0%	2.0%	0.0%	2.0%	2.0%	2.0%	0.0%	6.0%	14.0%	14.0%	16.0%
社会・スポーツ	50	11	1	0	0	1	6	0	6	8	0	7
		22.0%	2.0%	0.0%	0.0%	2.0%	12.0%	0.0%	12.0%	16.0%	0.0%	14.0%
合計	250	71	4	2	1	6	12	0	31	52	23	45
		28.4%	1.6%	0.8%	0.4%	2.4%	4.8%	0.0%	12.4%	20.8%	9.2%	18.0%

「文化・エンタメ」「政治・国際」「経済・雇用」「社会・スポーツ」の分野では順接接続詞の中で「だから」が最も多く使用されている。理系分野である「科学・環境」の分野では「その結果」「そのため」「したがって」に比べると「だから」の使用件数が少ないが, 最も使用されている「そのため」8.8件と「だから」5.2件の割合は71.8%であり, 「だから」の使用件数が0.1件の理系学術論文に比べると多く使用されている(表4)。「科学・環境」分野の論説文における「だから」の使用者の比率は18%であり, 論説文の他の分野に比べると少ないものの, 「だから」の使用者の比率が2%の理系学術論文と比べると, 「科学・環境」

の分野で「だから」が多く使用されていることがわかる（表5）。

webronza では「文化・エンタメ」「科学・環境」「政治・国際」「経済・雇用」「社会・スポーツ」の5分野に分類されている。しかし、例えば「科学・環境」の分野で感染症について述べつつ、感染症の政策についても論じている論説文があり、「政治・国際」の分野にも関連した内容が書かれている。学術論文に比べると専門分化されておらず、他の分野に跨る内容の論説文も見られる。

6. 学術論文と論説文における「だから」

前章で見てきたように学術論文では分野によっては「だから」が使用され、論説文ではどの分野においても「だから」が使用されている。以下、学術論文や論説文で使用される「だから」の用例を見ていくことにする。

6.1 学術論文における「だから」

表2で見ると、日本文学では10万字あたりの「だから」の使用件数が3.4件であり、他の分野と比べて、「だから」が多く使用されている。また表3で見ると日本文学、宗教哲学、社会学、刑法の分野で「だから」の使用件数が10%以上である。これらの分野では著者が文学作品や文化・社会現象の解釈を行うことがあるが、前件で理由を述べ、後件で著者が解釈をする際に「だから」が使用されることがある。以下、(1)~(4)がその用例である。

- (1) おそらく、二日の日の宴は、国司たちは各地より参集した郡司たちの接待に余念がなかったはずであり、家持をはじめとする国司たちは、その接待に気を使ったものと思われる。だから、家持たちは、郡司の招待宴が終わると安堵したはずである。（『日本文学』2014年63巻5号）
- (2) また既に触れたように曳山祭においてシャギリが農村部からの雇いシャギリによるものであって、山組によって行われるものではなかったため、山組間の競合の対象ではなかったことが挙げられる。だからこそ、山組間のシャギリの協力も問題とされにくかった。（『年報社会学論集』2016年29号）
- (3) 死者のいくばくかの実在性は、私たちによる死者についての語りのなかに今なお生き生きとしている。だから、その死者を傷つけてはいけないし、その死者についての語りをそれ自体として尊重しなければいけない、ということである。（『宗教哲学研究』2019年36巻）
- (4) 人は本来「弱い」存在であり、だからこそ各種の基本権の保障など法による保護を必要とする。（『刑法雑誌』2016年55巻3号）

向坂（2019）で論じたように、「だから」は主観的な結論付けを表す接続詞だが、学術論文の著者による結論付けは一つの解釈であり、必然的な結論とは限らず、著者の主観性が入り込む余地があるため「だから」を出現させていると考えられる。一方、理系分野では数値などに基づいて結論を出すことが求められているが、数値は客観的なものであり、著者の主観が入り込む余地がなく、またそこから得られる結論も必然的なものであるとされるため、理系の学術論文において「だから」の出現を妨げていると考えられる。

6.2 論説文における「だから」

論説文とは一般的な問題について自分の意見を述べ、論議する文章である。(5)~(7)は前件で理由を述べ、後件で著者が意見を主張する際に「だから」が用いられている用例である。論説文では、自分の意見を述べるのが重要であり、(5)~(7)で述べられていることは主観的な意見である。学術論文（とくに理系）では数値などに基づいた客観的な根拠を挙げることを要求されているが、論説文では学術論文に比べると客観性が要求されておらず、そのことが「だから」の使用を可能にしていると考えられる。

- (5) そしてこの「万人が認める事実」を提供するのが「科学」である。だから、デモクラシ

- 一にサイエンスリテラシーが必須なのである。(webronza 科学・環境 2021年4月13日)
- (6) お寺の未来は、そう明るくはない。だからこそ、檀家を含めた、関係者みんなの力を結集して、将来のことを考えるべきだと思う。(webronza 文化・エンタメ 2022年5月24日)
- (7) しかし、その「相続」から排除されてきた子どもたちがいる。それが「あるはずのものがない」親たちの現実である。だから簡単に「虐待する親」とは呼べないと私は思う。(webronza 社会・スポーツ 2021年12月10日)
- また、文系学術論文と同じように、社会や文化の現象についての著者の解釈の際に「だから」が用いられている用例が見られる。以下(8)~(10)がその用例である。
- (8) こうして完成した映画は、満若監督のキャラクターが乗り移ったかのように、まことに饒舌である。そしてその饒舌さゆえに、単純な要約を許さない。だから観た人は、それぞれに受け止め、自らの思いを持ち帰って解釈をするしかない。(webronza 文化・エンタメ 2022年5月19日)
- (9) 安倍・菅政権は、政権交代が次第に遠くにかすんでいくという実感を持てなかった政権でもあった。だからこそ、安倍首相は2014年、17年と小刻みに衆議院を解散し、政権基盤を確保しようとしたのである。(webronza 政治・国際 2022年5月3日)
- (10) ちなみに「シェール革命」でシェールガス、シェールオイルの生産を増やし、いまや世界最大の産出国となった米国の自給率は106%、北海油田がある英国も75%と高い。だからこそ米英はロシアに遠慮なく経済制裁をかけられるという面もある。(webronza 政治・国際 2022年4月27日)

7. なぜ小論文では「だから」の使用が可能なのか

向坂(2019)は日本語非母語話者向けの日本語学習教材において「だから」を話し言葉としている一方、日本語母語話者を対象とする国語表現の教材で「だから」を書き言葉であるとしており、日本語非母語話者向けの教材と日本語母語話者向け教材の比較をもって「接続詞「だから」の文体差について日本語教育と国語教育の間に共通した認識がない」と述べている(pp.174-176)。

しかし、これは日本語教育と国語教育の認識の違いではなく、教材がどのような文章を書くことを目標としているかの違いであろう。表1で見ると、論文・レポートを書くことを目標としている教材ではいずれも「だから」が話し言葉であるとされ、小論文を書くことを目標としている教材では「だから」が書き言葉とされているものと話し言葉とされているものがある。すなわち、小論文では「だから」の使用を可能であると説明している教材があるということである。

伊集院・高野(2020)(日本語文章表現教材『日本語を学ぶ人のためのアカデミック・ライティング講座』)では、「小論文」とは「与えられた課題に関し、主張(意見・立場・提案など)を根拠を挙げて論理的に伝えることを目的とする文章」であり、「根拠」は書き手の頭の中の知識や一般的知識、社会的常識でよい。資料やデータに基づく客観的証拠の提示や文献の引用はなくても問題ない」と説明している。一方で「レポート」とは「設定したテーマに関し、文献や資料を読んだり、調査を行ったりして情報を収集し、それらの根拠に基づいて結果と考察を論理的にまとめた文章」であり、主張の根拠としては「客観的な情報・データを収集することが必須」と述べている(p.11)。

論説文も小論文も「自分の意見を論理的に述べる」ことが重要だが、学術論文やレポートに比べると資料やデータなどの客観性の要求は高くない。

また、石黒(2012)(日本語文章表現教材『論文・レポートの基本』)では「小論文は時間制限と戦いながら試験場で書く文章です。そのため、その場で思いついた発想を自分なりに論理を組み立てて面白く書けばよく、厳密な検証は要求されません」とし、「小論文」では「ウソ」(不正確な内容)は「ある程度許容される」と述べている。一方、「論文」や「レポ

ート」では「ウソ」(不正確な内容)は「認められない」としている(pp.3-4)。

小論文は入学試験や就職試験の科目であり、通常は制限時間内に完成させなければならないうえに資料閲覧が禁止されているため、資料やデータに基づく客観的な根拠を示すことが物理的に困難である。

小論文は、学術論文やレポートに比べると客観性の要求が低いため、主観的な結論付けを表す「だから」の使用が可能なのである。

8. まとめ

日本語文章表現教材には「だから」は話し言葉であり、書き言葉文では使用されないとしているものと、書き言葉であり、書き言葉文では使用されるとしているものがある。学術論文と論説文における使用状況を調査したところ、理系学術論文では使用が稀であること、文系学術論文では分野によっては使用されていること、論説文では使用されていることがわかった。

「だから」が使用されないジャンルや分野の書き言葉文で「だから」が使用されないのは、「だから」が話し言葉であるためではない。「だから」は主観的な結論付けを表す接続詞であるため、理系学術論文のように客観性の要求が高いジャンルや分野では使用されないのである。「だから」が許容されるか否かは、書き言葉文であるか、話し言葉文であるかではなく、客観性の要求が高いかどうかである。小論文を書くことを目標とした教材で「だから」を書き言葉であると説明しているものがあるのも、小論文は学術論文やレポートに比べると客観性の要求が高くないためであると考えられる。

日本語文章表現教材では「「だから」は話し言葉であり、書き言葉文では使用されない」と説明しているものがあるが、学習者はどのような場合が主観的な結論付けで、どのような場合が客観的な結論付けなのかを判断できない場合もあるので、教育上の配慮として言い切った形で説明していることも考えられる。しかしこの説明は「だから」が主観的な結論付けを表す接続詞であるという本質を見えなくしている。教員としてはこの本質をよく理解し、著者である学習者が主観的な解釈や意見を述べているのか、それとも客観的な証拠に基づいて結論付けを行っているのかを見極めた上で学習者を指導する必要があると考えられる。

本研究では学術論文と論説文で「だから」が使われる例として、著者が現象を「解釈」をする場合と著者が主張を「意見」を述べる場合を挙げたが、どのような場合に学術論文や論説文で「だから」が使われるのかについてはさらなる考察が必要であり、今後の検討課題とする。

参考文献

- 石黒圭(2012).『論文・レポートの基本』,日本実業出版社.
- 石黒圭 (2016).『接続詞の技術』,実務教育出版.
- 伊集院郁子・高野愛子(2020).『日本語を学ぶ人のためのアカデミック・ライティング講座』,アスク出版.
- 沖森卓也(2016).『文章が変わる接続語の使い方』,ベレ出版.
- 国語教育研究所(1991).『国語教育研究大辞典普及版』, 明治図書.
- ひげひろし(1987). 「「それで」「だから」「したがって」」『教育国語』 88, pp.46-59.
- 向坂卓也(2019). 「学術論文における接続詞「だから」の使用」『日語偏誤与日語教学研究』 4, pp.172-188
- 向坂卓也(2021). 「学会誌論文における原因理由を表す接続表現「ことから」」『日本語教育方法研究会誌』 28 (1), pp.112-113.
- 劉怡伶(2006). 「接続語「だから」の意味・用法 - 前件と後件に因果関係が認められる「だ

から」を中心に -」『世界の日本語教育』16, pp.125-137.

参考教材

- アカデミック・ジャパニーズ研究会(2015). 『改訂版 大学・大学院 留学生の日本語④論文作成編』, アルク.
- 石黒圭・筒井千絵 (2009). 『留学生のためのここが大切 文章表現のルール』, スリーエーネットワーク.
- 石黒圭(2012). 『論文・レポートの基本』, 日本実業出版社.
- 伊集院郁子・高野愛子(2020). 『日本語を学ぶ人のためのアカデミック・ライティング講座』, アスク出版.
- 伊藤博貴(2016). 『小論文をひとつひとつわかりやすく』, 学研プラス.
- 井下千以子(2019). 『思考を鍛えるレポート・論文作成法第3版』, 慶應義塾大学出版会.
- 河守晃芳(2021). 『7日間で合格する小論文』, 学研プラス.
- 神崎史彦(2010). 『大学入試小論文の完全攻略本』, 文英堂.
- 桑田てるみ・江竜珠緒・押木和子・勝亦あき子・松田ユリ子(2015). 『学生のレポート・論文作成トレーニング - 改訂版』, 実教出版.
- 小森万里・三井久美子(2016). 『レポート・論文を書くための日本語文法』, くろしお出版.
- 鈴木鋭智(2020). 『改訂版 何を書けばいいかわからない人のための 小論文のオキテ55』, KADOKAWA.
- 大修館書店(2018). 『国語表現 改訂版 (平成30年)』, 大修館書店.
- 友松悦子(2008). 『小論文への12のステップ』, スリーエーネットワーク.
- 二通信子・佐藤不二子(2003). 『改訂版 留学生のための論理的な文章の書き方』, スリーエーネットワーク.
- 二通信子・大島弥生・佐藤勢紀子・因京子・山本富美子(2009). 『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』, 東京大学出版会.
- 浜田麻里・平尾得子・由井紀久子(1997). 『大学生と留学生のための論文ワークブック』, くろしお出版.
- 樋口裕一(2004). 『小論文 これだけ!書き方 超基礎編』, 東洋経済新報社.
- 深澤のぞみ・濱田美和・深川美帆・札野寛子・松田佳子(2018). 『21世紀のカレッジ・ジャパニーズ』, 国書刊行会.

関連 URL

J-stage 国立研究開発法人科学技術振興機構 <https://www.jstage.jst.go.jp/>
webronza 朝日新聞社 <https://webronza.asahi.com/>